# 「－ぽい」の意味用法と展開

On the Historical Change of "poi" through Meanings and Usages

岩　崎　真梨子
Mariko IWASAKI

## 1．はじめに

「－ぽい」は形容詞を形成する接辞である。その一方で、近年の「－ぽい」には、

(1)　最近中二になって彼女ができたっぽいのにまだまだあどけない。

（舞城王太郎『みんな元気。』2004〈平成16〉）

のような例が見られる。この例は、「安っぽい時計」「怒りっぽい人」「水っぽい酒」のような人やものの性格・性質を表すものとは異なる。「－ぽい」が承ける「彼女ができた」は、話者（母親）が最近中二になった息子の様子をそう捉えたということを示している。また、『日本語文法ハンドブック』では、〈「どうやら明日は雨っぽい。」のように、状況からの判断を表す〉用法が見られるとの指摘がある（398頁より引用）。この「明日は雨（が降る）」は、発話時において雨が降っているのではなく、その可能性のある事柄を示していると考えられる。

本稿では、「－ぽい」を意味の観点から分類し、その展開を示す。これによると、「息子に彼女ができたっぽい」や「どうやら明日は雨っぽい」のような、ある状況を踏まえて話者の判断を表す用法は、昭和の終わり頃に成立する。本稿の目的は、こういった「－ぽい」の意味用法がどのように成立し、用いられているかを明らかにすることにある。

調査資料、用例数は以下に示す通りである。

【調査資料】

文学作品：近世『洒落本大成』『滑稽本集』『誹風柳多留　新装版』『浮世風呂』『浮世床　四十八癖』『花暦八笑人　滑稽和合人　妙竹林話七偏人』明治『明治開化期文學集』『坪内逍遥集』『女學雑誌・文學界集』昭和『昭和文学全集』『宮本百合子集』など

CD-ROM：『新潮文庫の100冊』（翻訳作品除く）『明治の文豪』『大正の文豪』『太陽コーパス』

先行研究：『国語辞典にない言葉』『言語生活の耳』

小説（1990-2010）：吉本ばなな『N.P』『キッチン』他、山本文緒『パイナップルの彼方』『恋愛中毒』、宮部みゆき『夢にも思わない』、有川浩『図書館内乱』他、伊坂幸太郎『ラッシュライフ』他、舞城王太郎『山ん中の獅見朋成雄』他、山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』など

漫画：多田かおる『愛してナイト』(1982-1984)、高屋奈月『フルーツバスケット』(1998-2006)、

相田裕『GUNSLINGER GIRL』（2002-2010）など

その他、1990年代後半の新聞記事、1990年代・2000年代の雑誌（女性向けのファッション雑誌に多く見られる）についても調査している。

【用例数】

| 近世 | 明治 | 大正 | 昭和 | 平成 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 77 | 175 | 163 | 945 | 1551 | 2911 |

## 2．意味用法の変遷

以下、各意味用法を通時的に見ていき、それらがどのように関わるかについて検討する。

### 2-1．近世の「－ぽい」

「－ぽい」は形容詞を形成する接辞であり、人やものに目立つ特徴を示す。その用法は、上接部に性質・状態を示すものを取るか、行為を示すものを取るかで２分される。行為を示すものを取る場合は、「すぐ／よく～する」という容易性を示す。これに対し、性質・状態を示すものを取る場合は、顕著な特徴を示す用法と割合を示す用法に分かれる。上接部が人やものに混合されない場合は、「その特徴が多い」という顕著な特徴を示し、上接部が人やもの、空間などに対し混合される具体的なものを指す場合は「含有率が高い、濃度が高い」という割合の高さを示す。構文としては「X=Y」（【この酒】は【水っぽい】）となる。ここでのＹは形容詞性接辞である。

以下、各意味用法の実例を見ていく。まず、顕著な特徴の用法の例を挙げる。

(2) a　「都て高田馬場の體、上の方に料理茶屋一軒」卒八「だいぶ荒ツぽい書きやうだネ」

（滝亭鯉丈『八笑人』４編上　1828〈文政11〉）

b　和次「コウ鳥渡見な、アレ舳先の方に後を向いて腰を掛けて居る年増の、ソレ藍微塵の衣物を着て居る」矢場「ムウ餘程婀娜ツぽい後ツつきだ」

（為永春水『和合人』４編下　1845〈弘化２〉）

人やものに対し、「（上接部に示される）特徴が多い」ことが示される。上接部は形容詞語幹「安」「荒」や形容動詞語幹「哀れ」「気障」など、名詞「愚痴」「理屈」などである。この用法は、上接部が最も多様であり、表すものも幅広い。

続いて、割合の高さを示す用法の例を挙げる。

(3) a　麦めしもはやくどかべりが来る物なり。ひしきめしは水ッぽく力なし。雑水は咽がかわき。

（鈍九斎章丸「残座訓」1784〈天明４〉）

b　張吉「其事々々。あんまり白ツぽい顔ぢやァ、思ふ様に洒落も地口も出やァ爲ねへ」

（為永春水『和合人』４編上　1845〈弘化２〉）

主にもの、及び人の身体部位に対し、「（上接部の）含有率が高い、濃度が高い」ことが示される。

上接部は「水」「骨」などの名詞や、「白」「黒」などの形容詞語幹、語根「湿」[*1]である。

最後に、容易性を示す用法の例を挙げる。

(4)a　ほんにお前は余程腹たちっぽいよ　（山手馬鹿人「粋町甲閨」1772-1781〈安永年間〉）

b　そして好男ほど浮虚で飽ツぽい物さ。　（式亭三馬『浮世風呂』２編下　1810〈文化7〉）

人・ものの性格・性質に対し、「すぐ／よく～する」ことが示される。上接部は主に「飽き」「忘れ」など動詞連用形であり、「自分の意思では制御できないこと、意図せずそうなる」行為に限られる。

以下、近世の「－ぽい」の意味用法について見ていく。なお、「－ぽい」の初出例は(5)である。これは顕著な特徴を示すと同時に割合の高さも示している。

(5)　見に行てしめつほく出る拂藏　（呉陵軒可有等編『誹風柳多留』初編　1765〈明和２〉）

この例では、「藏の湿り気の多さ」「売られていく藏を見る人の沈痛な気持ち」とが示されているとある（宮田正信校注『誹風柳多留』参照）。このように、「湿っぽい」は「場所・物」に対しては具体的な「湿り気」が含有されて「湿り気の多さ」を示し、一方で「人の心情」に対して用いられる場合は「湿り気」という具体的なものではなく「沈んだ気持ち・雰囲気」を示す。この例からも明らかな通り、「－ぽい」は人ともの双方の性質・状態を示す。しかし、近世の「－ぽい」では人の容姿・性格・言動について述べる例が８割以上を占め、人に対して用いられる傾向のある接辞であると思われる。また、３つの意味用法は何に対して用いられるかで区別される。

まず、顕著な特徴を示す用法は、主に人の言動・容姿に対して用いられる。(6) は言動、(7) は容姿について述べたものである。

(6)「ハヽア涙ぐんで否に怨みつぽくにらめやァがるぜ」

（梅亭金鵞『七偏人』２編上　1857〈安政４〉）

(7)　喜次「ノホン、其處で今一人の人形は、ぐつと仇ツぽい中年増いふのだから、古人段付をしたらば、何程ぐらゐの相場だらう」　（梅亭金鵞『七偏人』２編上　1857〈安政４〉）

割合の高さを示す用法は、人の容姿、なかでも身体的特徴を示す際に用いられる。

(8)a　しかし大江山（おおえやま）のすつてん童子（どうじ）にでもさらはれると是非然（さう）さ。その時実沢山（みだくさん）でヤンヤといはれるは恐（おそれ）ながら旦ばかりス。酒肥（さけぶとり）でお腹に酒が絶えねへから酒塩（さかしほ）いらず。おかこさんなどは骨多（ほねつぽ）くて吐出（はきだ）される。　（式亭三馬『四十八癖』４編　1813〈文化10〉）

b　張吉「其事々々。あんまり白ツぽい顔ぢやァ、思ふ様に洒落も地口も出やァ爲ねへ」土場六「ヲウ白ツぽいとは」張吉「白ツぽいとは白ツぽい事よ。解らずば言つて聞かせやう。

（為永春水『和合人』４編上　1845〈弘化２〉）

---

[*1]「しめ」を語根とすることについて、松井（1983）では〈「しめ」は「しめやか」・「じめじめ」などの「しめ」、「むか」は「むかつく」「むかむか」などの「むか」で、語根または語基などと言われる要素と見るべきであろうか。〉のように記述される。また、動詞連用形「湿りっぽい」が見られること、他の語根接続の例として「むかっぽい」「ごそっぽい」なども見られることから、語根接続としたほうがよいのではないかと考えられる。

(8)aであれば骨が多い、(8)bであれば白みが強いことが示されている。なお、「骨っぽい」「水っぽい」などは上接部が含有され、そのものが外見に現れることはないが、(8)bのような色彩を表すものについては、その性質が外見にも現れる。

容易性を示す用法は、主に人の性格について用いられる。

(9)a　将棊をさして飯のくはれるほどになれば能けれど、おのしがやうな物あきをする者は、万一に飽ツぽくて、何を一ツとげた事がねへ。（式亭三馬『浮世風呂』前編下　1809〈文化6〉）

b　ほんに客人程疑りツぽいものアおざりいせんよ（鼻山人「花街寿々女」上　1826〈文政9〉）

(9)aでは「（お前は）すぐ飽きる」、(9)bでは「（客は）すぐ／よく疑う」ことが示されている。

このように見ていくと、近世の「－ぽい」は人について用いられるのが主だが、顕著な特徴を示す用法では言動、割合の高さを示す用法では身体的特徴、容易性を示す用法では性格を表すというように区別されている。

近世の「－ぽい」の意味用法をまとめると、以下のようになる。

- 性質を表す
  - （上接部が）混合不可能―顕著な特徴を示す
  - （上接部が）混合可能――割合の高さを示す
- 行為を表す――容易性を示す

2-2. 明治・大正期の「－ぽい」

近世に挙げた用法は、明治・大正期にかけて、次の通り変化する。

1．顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法において、人以外のものに対して「－ぽい」を用いる例が増加する。

2．顕著な特徴を示す用法の意味が3通りに分かれる。

3．正体不明のものに対して「－ぽい」が用いられるようになる。

4．顕著な特徴を示す用法・割合の高さを示す用法において、「－ぽい」の前文脈に修飾語／句を伴うものが見られるようになる。

以下、これら4点に留意し、意味用法の変遷を見ていく。

まず、明治期の半ば以降、顕著な特徴を示す用法・割合を示す用法において、人以外のものに対して「－ぽい」が用いられる例が増加する。

(10)a　包圍（まわり）には安（やすつ）ぽい虚飾（はでな）置物や額は見えず、　（若松賤子「小公子」1890-1892〈明治23-25〉）

b　差し向いの朝酒に、理窟ッぽいお談義を、やや辟易の態で、ならばうまくほぐらかして了おう了見だった。　（里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉）

(11)a　其人が學校の歸りよ。小倉の白つぽい縞の袴を穿いて、風呂敷包を抱えて、向ふからてく

てく歩いて来るのよ。　（田山花袋「手紙」1909〈明治42〉）

b　私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。

（梶井基次郎「檸檬」1923〈大正12〉）

このことから、主に人に対して用いられていた近世の「―ぽい」に比して、明治期では、用いられる場が広がったと考えられる。容易性を示す用法では、こういった拡張は見られない*2。

続いて、顕著な特徴を示す用法の意味が３通りに分かれる点について見ていく。顕著な特徴を示す用法の意味は、近世から明治期の初め頃までは「顕著な特徴のみを有する」ことを表す。これに対し、明治期の半ばより、「本来は持たない特徴を有する」ことを表す例が見られるようになる。

⑿　あ「私ア素人っぽい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」　（三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」1885〈明治18〉）

ここでの「素人っぽい」は、遊女が自分の行動について述べているもので、玄人なのに素人のようである（遊女でありながら遊女らしからぬ）ことを表していると考えられる。その後、明治の終わり頃より、「いかにも相応しい特徴を有する」ことを表す例が見られるようになる。

⒀　その下からさすがに子供っぽい小さな足を食み出してゐる

（田村俊子「あきらめ」1911〈明治44〉）

この例は、15歳の少女の足について述べるものである。「さすがに」ともある通り、いかにも子供に相応しい足であることを表していると取れる。

明治期より見られる２つの意味は、⑿⒀に挙げた「素人」や「子供」のような、その属性の典型を想定できる上接部を承ける場合に見られる。「素人中の素人」や「子供らしい子供」に対し、それに一致すれば「いかにも相応しい特徴を有する」意となり、不一致であれば「本来は持たない特徴を有する」意となる。これに対し、そういった典型を持たない「安っぽい」や「愚痴っぽい」などの類は、顕著な特徴のみを表す。意味が３通りに分かれることについては、近世より見られる「顕著な特徴を有する」ことのみを表す例が、実際の値段が安い・高いに限らず「安っぽい」といえることを踏まえれば、そう大きな変化ではないのではないかと思われる。一方で、話者が知覚によって捉えた人・ものと、ある属性の典型との一致・不一致が示される場合、話者が知覚するのは見た目などに現れる顕在的な証拠である。「安っぽい」などが潜在的な性質を表し、知覚によって（人やものが）捉えられた場合に顕在化されるのとは異なり、⑿や⒀のような例では先ず顕在的な証拠を知覚し、そのうえで

---

*2　容易性を示す用法には、そもそも人以外のものの性格を示す例が少ない（14例／128例）。以下、ものの性質・人の発話内容・生き物の性質を示すものを挙げる。

○紺染メハよこれつぽいとこなや言イ　（呉陵軒可有等編『誹風柳多留』33編　1806〈文化３〉）

○忘れっぽいモズがあちらこちらの枝につき刺した子ネズミの死骸に彼は眼を奪われたのだった。

（開高健「パニック」1957〈昭和32〉）

典型と一致するか否かを話者が判断するようになったという変化が見られる[*3]。

また、明治期の半ば以降では、正体不明のものに対して「－ぽい」でその性質を示す例が見られるようになる。

⑭a　凄じき勢で空中に投擲られた、石や、瓦や、砲車や、家屋や、其他種種なる何やらの黒ツぽき物体を、ばツと計火光の裡に照した、

（嵯峨の屋おむろ【訳】トルストイ【作】「セバストウポルの落城」1901〈明治34〉）

b　何しろ、胸はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッぽいものがもやもやしているし、大苦しみの最中で、はっきりとは憶えてませんが、……そうですか、その時にあなたもいらしったんですか」（里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉）

これらの例では、「何やら」や「なんだか」が共起しており、「物体」「もの」が何であるかはっきりしないと解される。一方で、正体が分からないなりに、その外見に現れる性質として色彩が示されている。従って、「－ぽい（もの）」によって「（正体不明のものが）そのような色に見えた」ことが表されていると考えられる。こういった「～に見える」意は、属性を示す用法・話者の推測を示す用法に共通するものだが、意味自体は明治期に既に見られたと考えてよいであろう。

さらに、明治期の終わり頃、前文脈に修飾語／句を伴い、人やものの性格・性質がより具体的に説明される例が出現する。

⑮a　手前共に口を聞く様な安っぽい男じゃないと、（夏目漱石「坑夫」1907〈明治40〉）

b　白ペンキで塗った安っぽい卓の上を、琥珀色の液体が、盛りあがって流れて来た。

（里見弴「多情仏心」1922-1923〈大正11-12〉）

たとえば、⑮aでは「手前共に口を聞く様な男ではない」ことと、「安っぽい男ではない」ことが示されている。この場合、ただ「安っぽい男」というよりも、その男がどういう人物であるかがより具体的に示されるのではないかと思われる。なお、先述の通り容易性を示す用法では人以外のものに

---

*3　なお、顕著な特徴を示す用法に関しては、昭和期の終わり頃以降、これまでになかった「－ぽい」が見られるようになるという変化も見られる。

○▼この春に、「春っぽい色」なんていうことばをテレビで覚えた長男（十歳）、夏には「夏っぽい」を使っていたが、ついに秋になって近所の奥さんの服に「あきっぽい色だ」と言ってしまった。

（「言語生活」1974.11〈昭和49〉）

○先日、東京渋谷駅近くの公衆電話で。しゃべっていたのは学生風の男性。「ダサイなあ。でも、そこがいかにもお前ッポイよ。」旧世代としては、「お前らしいよ」と言わないと、どうも落ち着かないんですが。

（「言語生活」1980.1〈昭和55〉）

このような「－ぽい」は、1970年頃から話し言葉に浸透し始め、それらの出易い雑誌や漫画、くだけた表現を用いる小説などで生産性を増しているものと思われる。また、「そこがいかにもお前ッポイよ。」は、用例にもある通り、意味が「－らしい」に近いと見てよく、話し言葉における「－ぽい」は「－らしい」の領域へと意味・用法を広げていると考えられる。

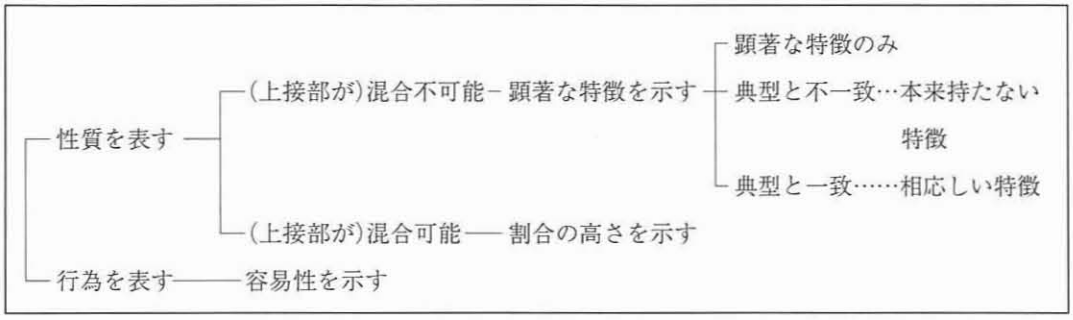
ついて述べる例が見られにくいが、こういった修飾語／句を伴う例についても見られにくい[*4]。容易性を示す「－ぽい」は、近世に引き続き、人の性格について述べる。

⑯a　お花は不審顔、『叔母さんと私と約束した事あつて、何だツたらう。』『おほほゝゝゝ。お花さんは忘れツぽいわねえ。　（広津柳浪「櫨紅葉」1901〈明治34〉）

b　『お前はよツぽど疑ぐりツぽい女だ。　（岩野泡鳴「断橋」1911〈明治44〉）

基本的な用法のなかでも、この用法は最も変化が少ないことが明らかである。

明治・大正期の「－ぽい」の意味用法は、近世に引き続き３つに分類されるが、顕著な特徴を示す用法の意味が３つに分かれる点で変化があるといえる。以下にまとめる。




### ３．昭和期以降の「－ぽい」　―属性を示す用法の成立―

昭和期の初めより、属性を示す用法が見られるようになる。ここでの「－ぽい」は、これまでに示したものと同様、人やものに「目立つ特徴を示す」形容詞性接辞であり、上接部は主に名詞である。構文としては、「X=Y」（【あの男】は【やくざっぽい】）だが、Xが正体不明のものになっている点で変化があり、この正体不明のXと「－ぽい」を照らし合わせる点に話者の推測が示される。たとえば、以下のような例が見られる。

⑰a　やがてその後ろの方から、学生っぽい女の子が戸惑った感じで現れた。カートは押しておらず、布製の大きなスーツケースを引いている。　（山本文緒『恋愛中毒』1998〈平成10〉）

b　あの、調布駅の地下通路ですれ違った、男だか女だか判んない、長髪の、オタクっぽいピンクのシャツの人じゃん何で!?　（舞城王太郎『阿修羅ガール』2005〈平成17〉）

正体不明の人・ものの特徴を捉えたうえで、「～に感じられる／見える／聞こえる」ことが示される。⑰aでは「女の子が学生に見える」、⑰bでは「ピンクのシャツの人はオタクに見える」ことが示されていると考えられる。「女の子」や「人」などはそれだけでは内容が不十分であり、「ピンクのシャ

*4　以下の２例に留まる。
○独逸の歴史家モムゼンは専門以外のことは何でも忘れっぽいので聞えた男で　（薄田泣菫「茶話」1916-1918〈大正5-7〉）
○性こりもなく惚れっぽいくせに、心そこの情は案外に浅く、　（瀬戸内晴美「みれん」1963〈昭和38〉）

ツの」といった修飾語や「－ぽい」によってどういう人物であるかが示されている。(14) bに示した「(正体不明のものに対し) 黄色っぽいもの」という場合は、「もの＝黄色」のように上接部のみを照らし合わせることはできない。しかし、この用法では「ピンクのシャツの人＝オタク」というように、上接部のみを正体不明の人・ものと照らし合わせることが可能であると考えられる。

この用法の変遷は、以下の通りである。

1．昭和の初め頃より、正体不明のものを上接部として言い表す（照らし合わせのみを行う）例が見られる。

2．昭和の終わり頃より、正体不明の人やものの特徴から、上接部の典型と照らし合わせ、その人・ものが属する属性を示す例が見られる。

まず、昭和期の初め頃の例を挙げる。

(18) a　田舎に着いた日、その地方は五月の嵐っぽい天候であった。俥に乗って市から村へ通じる寂しい一本道にかかると、荒い幅広い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。

(宮本百合子「伸子」1928〈昭和３〉)

b　暫くして、佃が露骨に喧嘩っぽい調子で詰問した。　(宮本百合子「伸子」1928〈昭和３〉)

c　熱くなると、居たまらなくなった虱が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪(あぶら)ッぽいコロッとした身体の感触がゾッときた。

(小林多喜二「蟹工船」1929〈昭和4〉)

これらの例では、それだけでは説明不十分な「天候」「調子」「(コロッとした身体の) 感触」がどういったものか／どのように感じられるかが、上接名詞「五月の嵐」「喧嘩」「皮膚の脂肪」として表されている。これらの例では、「話者が知覚した正体不明のものを、(話者によって) 最も適当な言葉で言い表すならば上接部」であるという照らし合わせのみが示されており、XがYに属するといった意味は生じないと考えられる。

昭和期の終わり頃になると、1の例に加えて、「(話者の観察によると) 正体不明の人・ものの特徴から、上接名詞の属性に属するように感じられる／見える／聞こえる」例が見られるようになる（用例［　］内は岩崎による補足)。

(19) a　こちらを向いている角刈りのやくざっぽい男がおり、女の髪をつかんでカウンターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っていた。

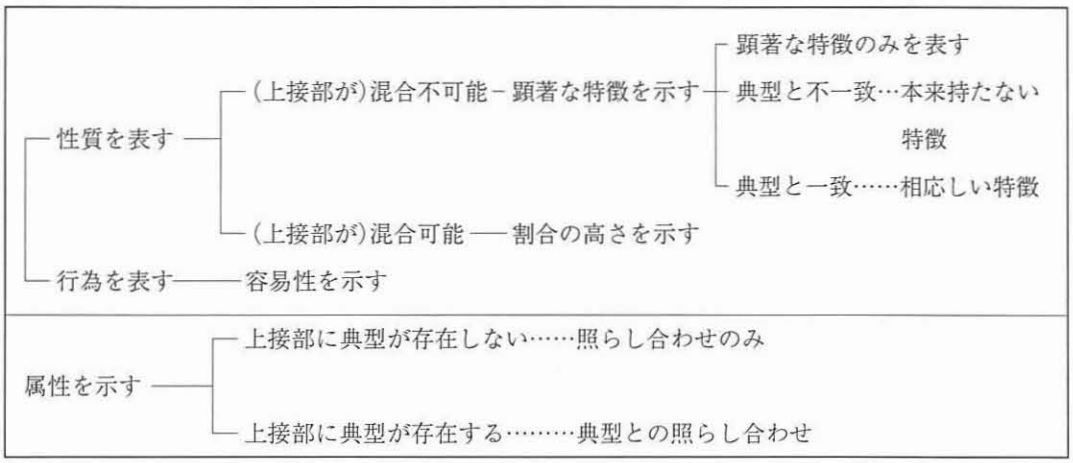
(五木寛之「こがね虫たちの夜」1969〈昭和44〉)

b　［写真を見ながら］湘南の海岸でしょうか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぽい男と肩を寄せ合っている。　(泡坂妻夫「花火と銃声」1988〈昭和63〉)

これらの例では、「こちらを向いている男」「トシ子が肩を寄せ合っている男」が「やくざ」の特徴を有しており、「話者からはやくざに見える」ことが示されている。ここでの上接名詞「やくざ」には、「やくざらしいやくざ」という属性の典型が存在すると思われる。正体不明の「男」の有する特徴は、「や

くざ」に属するに相応しいものであると考えられる。このように、正体不明の人・ものと照らし合わされる属性に典型があると考えられる場合は、上接部の示す属性に属することへの相応しさも表れるのではないかと考えられる。

昭和期以降では、これまでに見られなかった意味用法が成立する。ここで属性を示す用法が成立した段階での「－ぽい」の意味用法を以下にまとめる。




## 4．昭和期以降の「－ぽい」 ―話者の推測を示す用法の成立―

昭和の終わり頃より、話者の推測を示す用法が見られるようになる。この用法では、ある状況（α）について、「X=Y」が成立することを推測する。従って、状況や事柄、文脈などをうけ、そのなかで「X=Y」を成立することが述べられる。構文としては、「α：[X=Y] っぽい」である。主に句[*5]を承ける。また、この用法には、次の２つのパターンが見られる。

１．ある状況を話者の言葉で言い表す。

２．話者が捉えた状況から、推論を経て上接部（推測内容）を導き出す。

１と２は、「－ぽい」の上接部が示す内容と判断の在り方において異なる。１の「X=Y」はある状況を言い換えたものである。以下に用例を示す。

⑳ 「あの子、林くんと付き合ってない？」

父さんが「ハア？」と眉をしかめた。私はそれを横目に、「まだ付き合ってはいないっぽい、何となく」と言った。（豊島ミホ『檸檬のころ』2005〈平成17〉）

この例では、「私」が「あの子」と「林くん」の様子を見たうえで、現状としては「まだ付き合っ

*5 本稿でいう句接続は、上接部が語以上の単位となっていると考えられるものとする。初出例は以下の通り。
○F女史「自信のありっぽい子どもたちですから……」（「言語生活」1969.2〈昭和44〉）
この上接句は、「Nの動詞連用形」で成り立っており、「NのN＋（っ）ぽい」（名詞接続）のようなものから派生したのではないかと考えられる。他に、動詞のテイル形・テイタ形やタ形・ル形などを承ける。

ていない」と捉えていることが示されている。ここでの「－ぽい」は、α＝［X=Y］が成立する可能性の高さを示す。

これに対し、２では、「X=Y」はある状況から導き出された推論である。従って、αと「X=Y」は異なる内容を指す。以下に用例を示す。

㉑「そんでご両親、あんたの仕事ぶりのほうは何て？」

「あー、おかんはけっこうどーでもよかったっぽい。二日目とかめちゃくちゃ暇持て余してたし。じゃあ来んなって感じだけど。おとんは手強かったな、抜き打ちでレファレンス吹っかけられてしかも手塚と比べられた」　（有川浩『図書館内乱』2006〈平成18〉）

この例では、話者が見たのは「母親が二日目にめちゃくちゃ暇を持て余していた」状況と考えられるが、そこから「おかんは自分の仕事ぶりはけっこうどーでもよかったっぽい」と述べている。この場合は、「（話者が見た）状況 → 推論 → －ぽい」というように、推論を経て上接部が導き出されている。ここでの「－ぽい」は、証拠に基づく推論「X=Y」が成立する可能性が高いことを示す。

通時的に見ると、１の例がまず見られ、その後２の例が見られるようになる。以下、話者の推測を示す用法の変遷を見ていく。初出例は以下の通りである。

㉒　雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッポメだ」と言うのだそうです。　（「言語生活」1982.6〈昭和57〉）

ここでの「今日は雨っぽい」は、「雨が降りそうな」状況を話者の感覚で表したものであると考えられる。これは、いわば話者から状況が捉えられるかを示したものであり、推測の意は強くないと考えられる。話者の推測を示す用法の例では、このような「話者が実際に見た状況を、話者が感じた通りに言い表す」ものが一般的である。以下の例も同様である。

㉓　翌日、席についてぐったりしている私に、辻本くんが声をかけてきた。

「どうしたの、元気ないっぽいけど」

昨日は眠りが浅くて、ばくぜんと不安な夢を何度も見た。朝、鏡を見たら目の下にくろぐろとクマがあった。うんざりだ。　（豊島ミホ『檸檬のころ』2005〈平成17〉）

㉔　一段落するまで様子を眺めていた手塚が一人になった郁に駆け寄ってきた。

「何だったんだ？」

「いや、何か……小牧教官の知り合いっぽい。耳が不自由なんだって」

何かワケありみたい、と付け足したくなるのは柴崎の野次馬根性が伝染ったのかもしれないが、彼女に向けた小牧の笑顔は何だか特別のように見えた。

（有川浩『図書館内乱』2006〈平成18〉）

㉓は話者（辻本くん）が目の前の「私」を見たうえで、「元気ない」と捉えている。㉔についても同様で、話者は「小牧が彼女に特別な笑顔を向けて話す様子」を目の前で見ており、「彼女」は「小牧教官の知り合いである」と捉えている。

一方、話者が捉えた状況から、推論を経て上接部（推測内容）を導き出す例は、近年の例にのみ見られる。

(25) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。２DKで、もう一つの部屋は寝室っぽい。　（山崎ナオコーラ『人のセックスを笑うな』2004〈平成16〉）

(26) どのような経緯であの美人はあんなに怒っているのかと論理的に頭を働かせて、正解であろう結論に辿り着く。

「 ― あの。寝てません。寝てませんから、全然」

「……最悪ですね。いったい今までどんな躾をされてきたのさ、石杖［イシヅエ］さんは」

ビンゴー！　間違いない、初日から居眠りぶっこいたっぽいです俺！

（奈須きのこ『DDD』２巻　2007〈平成19〉）

(25)は、話者は「質素な部屋において画材や描きかけの絵が置いてある」状況を見ているが、「－ぽい」で示されるのは「もう一つの部屋は寝室」という、未だ入っていない部屋が何であるかについてである。(26)は、相手が怒っていることや発言などから「初日から居眠りぶっこいた」ことを導いている。

話者の推測を示す用法が成立した段階での「－ぽい」の意味用法は、以下の通り分類される。

- 性質を表す
  - (上接部が)混合不可能－顕著な特徴を示す
    - 顕著な特徴のみを表す
    - 典型と不一致…本来持たない特徴
    - 典型と一致……相応しい特徴
  - (上接部が)混合可能 ―― 割合の高さを示す
- 行為を表す ―― 容易性を示す

- 属性を示す
  - 上接部に典型が存在しない……照らし合わせのみ
  - 上接部に典型が存在する……典型との照らし合わせ

- 話者の推測を示す
  - 状況のみ……ある状況を話者の言葉で言い表す
  - 状況と推論……推論を経た推測内容を導く

## ５．おわりに

以上の通り、意味用法の広がりを中心に「－ぽい」の展開について検討してきた。これによると、「－ぽい」が話者の推測を示す用法へと広がったのは昭和期の終わり頃であり、そのきっかけとして、属性を示す用法が見られるようになったことが重要であると考えられる。昭和期以降に見られる属性を示す用法は、それまでに見られる「この酒は水っぽい」と同様、「X=Y」であることを示す形容詞性

接辞だが、Xの正体が不明であり、XとYを照らし合わせる点に話者の推測が入り込む。その後、ある状況について「X=Y」が成立する可能性の高さを示す「－ぽい」が見られるようになったと考えられる。

これまでに見てきた意味用法の展開を初出年に基づいて示すと、以下のようになる。

| | 初出年 / 意味用法 | 1765-1772 | 1885 | 1911 | 1928 | 1969 | 1982 | 2003 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 【顕著な特徴】特徴のみ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 本来は持たない特徴 | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | いかにも相応しい特徴 | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 【割合の高さ】 | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 【容易性】 | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| ② | 【属性】照らし合わせのみ | | | | ■ | ■ | ■ | ■ |
| | 典型との照らし合わせ | | | | | ■ | ■ | ■ |
| ③ | 【推測】状況を言い表す | | | | | | ■ | ■ |
| | 推論を経た推測を導く | | | | | | | ■ |

【参考文献】

尾谷昌則（2000）「接尾辞「ぽい」に潜むカテゴリー化のメカニズム―「女っぽい人」は女ですか？」『日本言語学会第120回大会予稿集』

尾谷昌則（2005）「接尾辞ポイのモダリティ化」『日本語用論学会第８回大会研究発表論文集』創刊号

国松　昭（1970）「「ぽい」雑考（接尾語ノートⅠ）」『日本語と日本語教育』2

ケキゼ・タチアナ（2003）「「ぽい」の意味分析」『日本語教育』11

小出慶一（2005）「接辞「～ぽい」の用法の広がり　―「雪が降るっぽい」という表現はどのように成立したか―」『群馬県立女子大学紀要』26

小島聡子（2003）「接尾語「ぽい」の変化」『明海日本語』8

松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

宮田正信校注（1984）『誹風柳多留』新潮社

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

岩崎真梨子（2008）「「－ぽい」の展開と文法化」（2007年度日本語学会中国四国支部大会研究発表要旨）『日本語の研究』4-2

岩崎真梨子（2009）「形容詞性接尾辞「－ぽい」の展開」『岡大国文論稿』37

【用例出典】

■辞書類

小学館国語辞典編集部編（2001）『日本国語大辞典　第二版』小学館

田村俊子「あきらめ」

前田勇（1974）『江戸語大辞典』講談社

山手馬鹿人「粋町甲閨」

■先行研究

沢木幹栄（1989）『言語生活の耳』筑摩書房

松井栄一（1983）『叢書・ことばの世界　国語辞典にない言葉』南雲堂

薄田泣菫「茶話」

■文学作品

『花暦八笑人　滑稽和合人　妙竹林話七偏人』三浦理編　有朋堂書店　1915年／『洒落本大成』13巻　洒落本大成編集委員会　中央公論社　1981年（鈍九斎章丸「残座訓」所収）／『浮世風呂』日本古典文学大系63』中村通夫校注　岩波書店　1957年／『誹風柳多留全集　索引篇』岡田甫編　三省堂　1999年／『浮世床　四十八癖　新潮日本古典集成（第52回）』本田康雄校注　新潮社　1982年／『洒落本大成』27巻　洒落本大成編集委員会編　中央公論社　1987年（鼻山人「花街寿々女」所収）／『女學雑誌・文學界集　明治文學全集32』笹淵友一編　筑摩書房　1973年（若松賤子「小公子」所収）／深沢七郎　瀬戸内晴美　有吉佐和子　水上勉　曾野綾子『昭和文学全集25』小学館　1988年（瀬戸内晴美「みれん」所収）／『宮本百合子集　新潮日本文学21』宮本百合子　新潮社　1973年（「伸子」所収）／吉村昭　立原正秋　宮尾登美子　山口瞳　新田次郎　五木寛之　野坂昭如　井上ひさし『昭和文学全集　26』小学館　1988年（五木寛之「こがね虫たちの夜」所収）

■CD-ROM

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社　1995年

梶井基次郎「檸檬」／開高健「パニック」／夏目漱石「こころ」

『CD-ROM版 新潮文庫　明治の文豪』新潮社　1997年

夏目漱石「それから」「坑夫」

『CD-ROM版 新潮文庫　大正の文豪』新潮社　1997年

里見弴「多情仏心」／岩野泡鳴「断橋」

『太陽コーパス　雑誌『太陽』日本語データベース』国立国語研究所編　博文館新社　2005年

田山花袋「手紙」／嵯峨の屋おむろ【訳】「セバストウポルの落城」／広津柳浪「櫨紅葉」

『CD-毎日新聞'97』1998年・『CD-毎日新聞'98』1999年　毎日新聞社

■インターネット

青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）

三遊亭圓朝「業平文治漂流奇談」／小林多喜二「蟹工船」

KOTONOHA　現代日本語書き言葉均衡コーパス（http://www.kotonoha.gr.jp/demo/）

泡坂妻夫「花火と銃声」

■小説

『みんな元気。』舞城王太郎　新潮社　2004年／『恋愛中毒』山本文緒　角川書店　1998年／『阿修羅ガール』舞城王太郎　新潮社　2005年／『檸檬のころ』豊島ミホ　幻冬舎　2005年／『図書館内乱』有川浩　メディアワークス　2006年／『人のセックスを笑うな』山崎ナオコーラ　河出書房新書　2004年／『DDD』２巻　奈須きのこ　講談社　2007年

［付記］本稿は、2009年度秋季日本語学会（2009.11.1）、並びに第232回　筑紫日本語研究会（2010.8.9～2010.8.11）にて行った口頭発表に基づくものである。席上、貴重な御意見を賜った。感謝申し上げる。